

2015年9月20日(日)

市民と「いのちみつめて」20年 年4回、仏教の心学が講演会開く



かり、この講演会を知った。自分が占いに頼り、振り回されていることがわかり、聴講してよかった」と語った。毎回参加する光賢寺

10年前にがんを発症、自分の命を見つめ直した西池住職は今、「いのちってしんどいね」と言いつつ、新たな気持ちでいのちの公開講演会と関わる。「決して、生きることが楽になるというわけではないが、講演会に携わり、続けることで私自身が育てられている。『いのちのしんどい』を抱えた方がおられたとき、一緒にそばにいられる僧侶でありたい。今しなければならぬことを」と思い、会の継続に力を注ぐ。

8月の講演会。当日券を買って入ったという女性が、手を挙げた。「たまたま前を通りか

市民と一緒に仏教の心、いのちを見つめる心や学びが公開講演会「いのちみつめて」が、20年目を迎えた。年4回開催(有料)し、僧侶をはじめ医師など幅広いジャンルから講師を招き、いのちを見つめ続ける。78回目となった8月30日は、とりぎん文化会館(鳥取市)で、宗門校・龍谷大学の鍋島直樹教授が講演、50人の門徒や市民が聴講した(写真)。

ねた仮設住宅で、高齢の女性から「ほんまものお坊さんになつて、悲しみに寄り添う人になって」という言葉を聞いたこと。西池住職が何に取り組みうかと悩み始めた矢先、友人の自死という深い悲しみに出あった。その大きな悲しみは、後押しされるかたちで、『阿弥陀』という不思議なはたらきに照らされ、生かされていくことに、多くの人が気付いてほしい」ときっかけは、鳥取県八頭町・光賢寺の西池文生住職(52)が20年前、阪神・淡路大震災でのボランティアで訪

講演会を始めることを決意した。企画や運営をしようとして、周囲の僧侶や門徒に呼びかけた。